

⑦ いなむらの火

安政元年（一八五四年）十二月のこと、広の村一帯に大きな地震がありました。屋根がわらが飛び、家の壁はくずれ、土ぼこりが空高くまいあがりました。村じゅうの井戸水がすっかりかれました。大地のゆれがおさまった後も、ときおり、どこからともなく、ドーンという大きな音が聞こえてきました。空は、帯状の黒い雲でおおわれ、村中は不気味さで包まれました。

「これはたいへんだ。」

村の高台から、遠く海の沖合を見ていた儀兵衛は、つぶやきました。海の水が、沖の方へ沖の方へと吸い寄せられていくのです。黒い海底が見えるようになりました。

「津波^{つなみ}がくる。津波がやってくるにちがいない。このままにしておいたら、四百の命と村がひとのみにされてしまう。」
そう思った儀兵衛は、家の中からたいまつを持ち出し、自分の田に高く積^つまれた、刈^かり取ったばかりのいなむらの一つに火をつけました。

「……、これで村人たちの命が助かる。」
そして、さらにもう一つのいなむらに火をつけました。

「この高台までのめじるしだ。」
こうして、儀兵衛は自分の田のすべてのいなむらに火をつけました。



いなむらの火は、夕やみの中、天をこがしました。

村の寺の早鐘はやがねが鳴りわたりました。

「たいへんだ。庄屋様しょうやさまの家が火事だ。」

村人たちは、大人おとなも子どもも、次から次へと、高台目指めざして登ってきました。それは、村から高台へと長い列になりました。

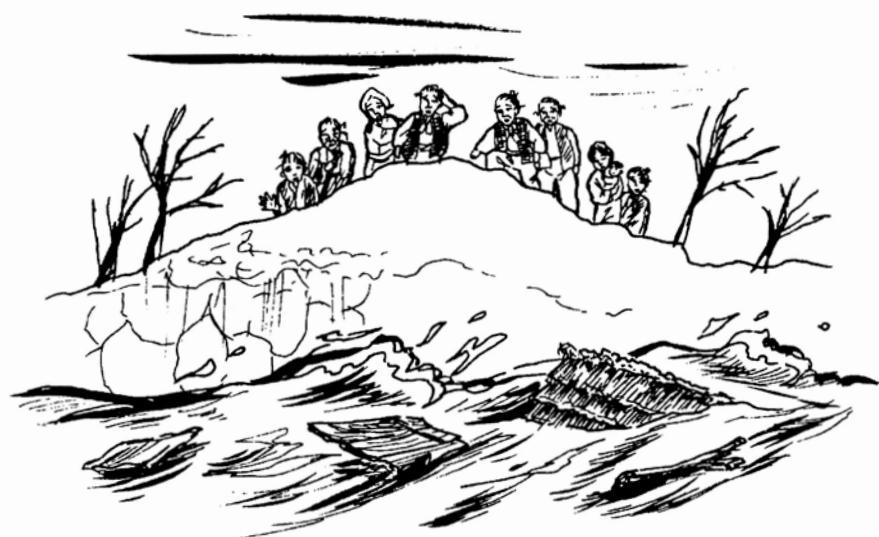
「急げ、高台へ急ぐんだ。津波がくるぞ。」

と言う、儀兵衛が最初に高台に来た男にかけた言葉は、人びとに伝わっていきました。儀兵衛は登ってくる村人の人数を数えていました。

村人が、高台に登りきったとき、

「見よ、海を！津波だ！」

と、儀兵衛が指さす沖合おきあを見ると、山のようにもりあがった海水が、ゴォゴォと音を立て、村をめがけて迫せまってきました。水けむりを立て、二度三度と、大波は村の上を荒れ狂あい、退ひいていきました。



家は――

舟ふねは――

田は――

村人は、ぼう然ぜんとして、言葉もなく、ただ村を見下ろすだけでした。

しばらくして、

「助かったんだ。わしらは、助かったんだ。」

という声が、だれからともなくあがりました。

その声は、燃え続けるいなむらの火とともに、いつまでも続きました。

この津波の後、儀兵衛たちは、津波から村を守るために、堤防ていぼうをつくり始め、四年後に完成かんせいしました。

その後、この堤防は、津波を防ふせいで、今も広の町に残り、町の人たちは、毎年十一月の初めに、津波から広の町を守った人びとに感謝かんしゃの心をささげるために、津波祭つなみさいを行っています。